有島武郎著作集第十一輯『惜みなく愛は奪ふ』を読む㈡

―本文分析を中心にして(1)―

宮野光男

一

本論は、先に公にした「有島武郎著作集第十一輯『惜みなく愛は奪ふ』を読む㈠ ―エピグラフ解釈・自註分析を中心に―」〔梅光女学院大学「日本文学研究」第23号 昭62・11所収 以下㈠と称する〕に続いて、この著作集に収録されている表題エッセイが、有島の求めた新しい愛の論理追究のプロセスと、その可能性とを表明したものであるか否かを、エピグラフとして掲げられているホイットマン詩との関連において考察することを目的とするものである。

㈠においては、問題解明のために、そのホイットマン詩に対する有島の解釈と、「惜みなく愛は奪ふ」に対する有島の自註の検討を試みた。

そこで明らかになったことは、ホイットマン詩の役割が、有島の自己認識における否定が、肯定へと変化を遂げるための根拠として位置付けられているのではないか、ということと、愛の論理が、これまで見てきた各著作集(第一輯から輯十輯)のエピグラフ詩が示しているように、肯定的であり、そこに語られていた〈愛〉が、関係概念としてのそれであった[註1]のに対して、ここでは、関係概念否定の論理として位置付けられているのではないかということであった。

本論においては、「惜みなく愛は奪ふ」の本文の前半部分の分析を中心に、ホイットマン詩(主として I exist as I am)の、本文への影響を具体的に明らかにしながら、有島の求めた新しい愛の論理の可能性について考察して見たいと思う。

二

「惜みなく愛は奪ふ」が、有島の新しい愛の論理の展開としての愛論であると言う意味では、この論文の中心部が第一五章以下に展開している部分であることはいうまでもないことであるが、それに対して、第一章から第一四章までは、そのための前提となる部分であり、従来、有島が唱えてきた調和志向の愛の論理では回復不可能であると考えられている、有島にとっての否定的自己認識の確認の諸章だということができるように思われる。

このところに語られている有島の人間観は、「惜みなく愛は奪ふ」に至るまでの人間追究のプロセスの披瀝であり、その否定的人間観

は、たとえば、〈カインの末裔〉意識、〈荒野〉性などという言葉で表現されるようなものであった[註2]ことの再確認であるが、その意味でもこのエッセイが、有島の、人間の可能性追究の総決算的性格を持ったものであるということができるのである。

そこで、まず有島の新しい愛の論理追究の前提としての否定的自己認識（否定的人間観）について、有島が、それをいかに捉えているかを明らかにしておこうと思う。

＊

有島の「惜みなく愛は奪ふ」における否定的自己認識の基本は、孤独認識である。

それは〈点〉としての存在認識として捉えられているが、その〈点〉的存在が、時間における〈永劫〉のなかにあって無に等しい存在であることを有島は次のように述べている。

恐るべき永劫が私の周囲にはある。永劫は恐ろしい。或る時には氷のやうに冷やかな、凝然としてよどみ亙る或るものとして私にせまる。又或る時は眼もくらむばかりかゞやかしい、瞬間も動揺流転をやめぬ或るものとして私にせまる。私はそのものゝ隅か、中央かへ落された点にしか過ぎない。広さと幅と高さとを点は持たぬと幾何学は私に教へる。私は永劫に対して私自身を点に等しいと思ふ。永劫の前に立つ私は何ものでもないだらう。それでも点が存在する如く私も亦永劫の中に存在する。私は点となつて生まれ出た。而して瞬く中に跡形もなく永劫の中に溶け込んでしまつて、私はゐなくなるのだ。それも私は知つてゐる。而して私はゐなくなるのを恐ろしく思ふよりも、点となつてここに私が私として生まれ出たことを恐ろしく思ふ。〔一〕

時間認識における〈永劫〉という概念も、人間を捉える否定的認識として覚えられなくてはならないもののひとつである。〈永劫〉とは、存在の虚無状況のひとつの表現であり、死の支配する時間であることは、ニーチェ哲学の根本思想のひとつである〈永劫回帰〉からも明らかであるが、有島がその否定的時間のなかにあって生きるべき者としての認識に立っていた者であることは、晩年の詩篇「瞳なき眼」〔大12・3〕の一節、〈あからさまに云はう、／大千世界は瞳のない眼だ。／見開いたまゝ瞬きをしない眼だ。／劫初から劫末へ、／ギャマンの皿にすかして見る烏賊の皮膚の色のやうな白眼だけが。／凝然として、動かずに流れずに。〉を見ても明らかなことである。

人間が〈広さと幅と高さとを持たぬ〉〈点〉的存在であるということは、たんなる卑小さを表現するための相対的認識ではなく、存在そのものの喪失と、あわせて関係形成の不可能性とを表明した認識であるように思われるのである。

もちろん、このところでは、それにもかかわらず存在している事実を否定することのできない、むしろ、なればこそ、その存在性を無限に拡大する可能性を求めなくてはならない有島がクローズアップされていることは言うまでもないことである。

そのような状況の人間を、有島また〈旅人〉として捉えている。

一人の旅客が永劫の道を行く。彼を彼自身のやうに知つてゐるものは何処にもゐない。陽の照る時には、彼の忠実な伴侶はその影であるだろう。空が曇り果てる時には、而して夜には、伴侶たるべき彼の影もない。その時彼は独り彼の衷にのみ忠実な伴侶を見出さねばならぬ。拙くとも、醜くとも、彼にとつては、彼以上のものを何処に求め得よう。かう私は自分を独りの旅客にして見る時もある。〔一〕

〈旅人〉性、それは〈荒野〉[注3]をさ迷い歩かなくてはならない孤独な不安な人間の謂なのである。

あるいはまた〈母を失った幼児〉〔一〕としての捉え方もなされているが、一方においては〈嬰児の如き信仰〉〔明32・3・16〕渇望の聖書的発想に通じる聖性のイメージであるが、このところからは、「リビングストン伝第四版序言」〔大8・6〕のなかの一節、〈三十四歳で私は元の嬰児になつた〉を、そしてまた、末尾の部分の、〈これから独りで出懸けます。左様なら。〉が想起されるところでもある。

〈孤独な者は自分の掌を見つめることにすら、熱い涙をさそはれる〉〔一〕者であり、有島の認識している自己の否定性が、〈私が生きて行く上に、無くてはならぬものである〉というような位置付けを試みてみても、それが実感としての生命感ではなく、結局は〈私の唯一の城廓なる私自身が見る〉〈廃墟の姿を現はすのを見なければならないのは、私の眼前を暗黒にする〉〔同前〕と言うように、自己を〈廃墟〉として捉えなくてはならない存在だということは、有島が、その人間観において基本的には否定的であったことを物語っているところだということができよう。

このような人間理解、自己認識が、有島の〈出発点〉〔同前〕だったのである。

＊

キリスト教信仰が、自己の否定的自己認識をより鮮明化させながら、それからの解放の唯一の根拠として位置付けられていた青年時代を省みて、〈神を知つたと思つてゐた私は、神を知つたと思つてゐたことを知つた〉〔三〕と言っているのは、その可能性が自己の内部の認識の問題でしかなかったことの確認である。それはまた、後章で展開する愛論が、人間の可能性追究に絞られた愛論であることの前提であり、その孤独状況認識の性格が、ニーチェのいう実存的自己創造を意図し、虚無の世界から人間のいっさいの価値と意味とを新たに創造すべき存在として位置付けるところの、〈超人〉性を持ったものであることを示しているのである。

まず自らの否定性を偽りなく認識することが、人間にとって一番正直な在りかたであるとするならば、それ以外の方法によるその状況からの脱出の試みは、所詮偽りの行為としての認定を免れないのは言うまでもないことである。したがって、有島がそのような自己を〈偽善者〉〔三〕として、あるいはまた、〈弱者〉〔五〕として、自らを戒めなくてはならなかったのも当然のことなのである。

＊

有島が、このような状況からの回復の可能性のひとつとして取り

上げているのが、〈見る事〉である。

物を見る事、物をそれ自身の生命に於てあやまたずに補捉する事、それは私が考へてゐたやうに容易なことではない。それを成就し得た人こそは世に類なく幸福な人だ、私は見ようと欲しないではなかつた。然し、見るといふことの本当の意味を辨へてゐたといへようか。摑み得たと思ふものが暫くするといつの間にか影法師に過ぎぬのを発見するのは苦い味だ。〔四〕

それにもかかわらず、有島にとって可能であったことは、一切のものが〈影法師〉でしかないという認識であった。まさに虚無に陥った人間発見以外の何ものでもなかったのである。

このような否定的自己認識が、前提としてではなく、神との関係においても、言わば桎梏として認識されなくてはならなかったところに、有島の信仰が〈擬似信仰〉(註4)であったとすることの内部徴証をみることができるのであるが、もちろん、これが、このエッセイ執筆時の、過去の事実に対する表現であることもまた忘れてはならないことである。

このところに、すでに述べてきたように、〈盲目状況認識〉(註5)という表現で言い表わすことのできる否定的人間観を見ることができるのであり、それが、所謂〈開眼願望〉(瞳憧憬論)(註6)、このエッセイの表現をもってするならば、〈公平な観察者鑑賞者〉〔同前〕であろうとする有島の内的必然性の顕現でもある。

三

前章で見たように、「惜みなく愛は奪ふ」前半において有島が確認していたことは、有島が、新しい愛の論理を求めなくてはならない限界状況認識に立っている者であることであった。そのような状況認識に対して有島は、爾後の問題としていかなる回復の可能性を想定することができたのであろうか。

人間存在の孤独性がその基本的人間観であるならば、このところで、本来ならば関係回復の可能性を内容とする〈愛〉の論理の可能性が問われなければならないところである。しかし、有島は愛に関しては〈相互的〉である必要を否定しつづけ〔一七〕、基本的には〈何んという多種多様な生活の相だらう。それはそのまゝで尊いではないか。そのまゝで完全な自然な姿を見せてゐるではないか〉〔四〕という現状肯定の論理を繰り返しているのである。

〈そのまゝで完全〉という表現に、エピグラフとして掲げられているホイットマンの詩、〈I exist as I am〉を想起することができるのであるが、このように、本質的には否定的人間観をもっている者であるにもかかわらず、ほとんど無媒介的に自己肯定の論理を展開することができるのは、なぜであろうか。そして、その根拠をどこに見出すことができるというのであろうか。

このところで、有島は、〈個性〉の完全さを全面的に押し出してくるのである。

*

有島の、〈私の個性は私に告げてかう云ふ〉〔六〕、と語り始め

る個性論は、〈個性に立ち帰れ〉〔同前〕と、個性復帰を慫慂するところの個性論であるが、この個性は、〈魂〉と同義語的に用いられているもので、本質的には存在としての他者ではなく、擬人化された、有島の理想像の本質とでもいうべきもののようである。

個性は、有島に対して〈お前に取つて私以上に完全なものはない。さういつたとて、その意味は、世の中のひとが概念的に案出する神や仏のやうに、完全であらうといふのではない。お前が今まで、宗教や倫理や、哲学や、文芸などから提供せられた想像で測れば、勿論不完全だといふことが出来るだらう。成程私は悪魔のやうに恥知らずではないが、また天使のやうに清浄でもない。私は人間のやうに人間的だ〉〔同前〕、という意味での〈個性に立ち帰〉ることを自己に要請するのである。

有島はさらにその〈個性〉が、有島がかつて信仰していた神すらも〈畢竟するに極く幽かな私の影にすぎな〉〔同〕〉いと言い、〈お前は私を出し抜いて宗教生活に奔つておきながら、お前の信仰の対象なる神を、私の姿になぞらへて造つてゐたのだ〉〔同〕〉と言うほどに、〈個性〉が完全なものであることを強調しているのである。

〈お前の個性なる私は、多くの人の個性に比べて見たら、卑しく劣つたものであらうけれども、お前にとつては、私の外により完全なものはない〉〔七〕のであり、〈私の誇りかなる時は誇りかとなり、私の謙遜な時は謙遜となり、私の愛する時愛し、私の憎む時憎み、私の欲するところを欲し、私の厭ふところを厭へばいゝのである〉〔同〕という意味での、絶対化された、存在の無条件的に肯定された〈個性〉でもある。

それは、〈永遠の否定を後ろにし、無関心の谷間を通り越して、初めて永遠の肯定の門口に立つことが出来るやうにな〉〔同〕る、自己回復のための基本的条件としての個性復帰なのである。

以上述べてきた個性は、復帰すべき個性であり、肯定的自己認識の根拠として位置付けられている個性であるが、何故そうでありえるのかという問いに対しては、あたかもホイットマンが〈私はありのままに存在する―それで沢山だ〉と歌っているように、具体的な理由は述べられていない個性なのである。

有島が、〈個性〉が個性として存在しえない状況にあるときに陥る人間の生活が、その程度に応じてそれを〈習性的生活〉〔一〇〕、〈智的生活〉〔一一〕と名付けていることは周知のことである。そして、それは、〈本能としての自己の表現を要求する個性は、習性的生活にのみ依頼して生存するに堪へない〉〔一〇〕、いわば石化してしまった段階から、有機性を回復した存在であるところの〈智的生活〉者として位置付けられてもいるのである。

このような状況に対して、人間の個性復帰の完全に成就した理想的状況にある生活が〈本能的生活〉と言われていることもまた周知のことである。

しからば、有島は、人間はいかにして〈個性〉への復帰が可能だと言うのであろうか。有島が自分自身の問題として、それ以上に〈完全なもの〉〔五〕はないという〈個性〉に全てを賭けるという

結論に至るまでのプロセスを、さらに、本文分析を通して考えて見よう。

*

有島が言葉の限界を語り〔二〕、それに替わるものとしての〈暗示〉〔同前〕を取り上げ、さらにその言葉をもっとも忠実に使役し、〈内部生命の発現を端的にしようとする人〉〔二一〕が〈詩人〉であるとしていることに関してはすでに述べたが、このエッセイの主旨に即して言えば、詩人が個性復帰を実現しうる一人であるとしている〔同前〕ことは、有島の精神構造の特色を知ることのできる一種の試金石であることを再確認しておかなくてはならないように思われる。(注7)

つまり、暗示が、言葉のもっている機能のひとつとしての可能性であり、表現されたものの言外の意味を読むことに関する可能性を現しているというのであれば、単なる比喩表現であるが、言葉のなかに眼に見えないものからの暗号を表現する可能性がある、つまり、言葉の背後にある不可思議な存在を問題にしているのであるならば、〈暗示〉は言葉を越えたものを暗示しているという意味で、暗示に富んでいるということになるのである。

前章において触れた、見ることへの期待―開眼願望―の切実さと、その実現可能性のひとつとしての〈暗示〉との関係が、クローズアップされてくるところでもある。

もしそうであるならば、このことは、有島の〈愛〉論考察のうえで、大変興味深い問題ともいうことができる。というのは、有島の愛論の基本である本能生活論理というものが、個性復帰を絶対条件にし、その個性はあらゆる点において、存在の、行動の根源的核となるものであり、それ以外の外力の存在を想定することは本来不可能のはずだからである。

*

さらに、ここで、個性に関するもうひとつの可能性について考えることができるのである。

それは、〈個性〉という言葉で表現されている所謂根源的自我なるものが、有島にとっては、一種の〈永遠なる自我〉と言うことのできる、他者としての〈個性〉としての存在の可能性についてである。

有島の、〈お前の神と称してゐたものは、畢竟するに極く幽かな私の影に過ぎなかつた〉という論理は、〈個性〉が容易に〈神〉と置き換えられるものでもある、ということができるのではないだろうか。一方では、あまりにも容易になされている〈個性〉の絶対化が問題になるところであるが、有島がかつて信じていた、そして今はもはや信じることの出来ないという〈神〉である可能性はないものであろうか、という問題なのである。

もちろん、ここで、キリスト教への復帰の可能性を論じようとしているのではない。繰り返しになるが、すでに、早い時期に有島の精神構造のなかで無色透明化してしまった神で、大正六年版の「惜みなく愛は奪ふ」の未定稿において〈奪ふ愛〉を本質とした神の姿をとどめていたものが、いま装いも新たに〈個性〉として再登場したのではないかということなのであり、換言すれば〈I exist as I am〉の〈I〉が本来的な意味で大文字化の可能性をもたされてい(注8)

るのではないか、という問いの可能性が問題となるということなのである。

先に見た〈暗示〉を重んじる文脈にも関係があるように思われるのであるが、㈠において有島の新しい愛の論理が、関係概念を逸脱したものではないかという仮説を立てたが、もし個性が、そのような可能性をその本質としてもっているのであれば、この個性との関わりが存続する限り、基本的には関係のなかでの愛の論理として機能していくのではないかと思われるところでもある。つまり、現実的な〈奪ふ愛〉は、他者である〈個性〉との関係成立を基本条件として成り立つ愛の論理だということになるのである。

四

ところで、有島の言う個性との関係が、究極的には、

それは必至な或る力が私をそこまで連れて来たといふ外はない。誰でもが、この同じ必至の力に促されていつか一度はその人自身に帰つて行くのだ。少なくとも死が間近かに彼に近づく時には必ずその力が来るに相違ない。一人として早晩個性との遭遇を避け得るものではない。私も亦人間の一人として、人間並みにこの時個性と顔を見合はしたに過ぎない。或る人よりは少し早く、而して或る人よりは甚だおそく。〔九〕

と述べているように、〈遭遇〉という表現がなされ、その条件が〈死〉であるということは興味深いことなのである。

〈或る神秘な力〉、〈地上の存在をかく導き来つた大きな力〉であるところの〈或る已みがたい力に促されて〉〔一二〕、有島の個性は〈新たなる存在へ躍進〉するのであり、〈その力の本源はいつでも内在的である。内発的である〉〔一二〕という発想は、個性を外在的他者として実在化することへの抑制の必要性を明らかにした表現でもあろう。

もちろん、〈その力〉の本源が、〈いつでも内在的である。内発的である〉ということは、〈即ち個性は外界の刺激によらず、自己必然の衝動によつて自分の生活を開始する〉ものであることの左証であり、そこに開始される生活こそが〈本能的生活〉だというのであるが、そのためにまた、〈或る力〉を想定しなくてはならないということは、〈個性〉の本質が元来そのようなものであることの顯現ではないかと思われるのである。このところで、死によってその存在が明らかになる〈或る力〉とは何かという問題が表面化するのである。この問題は、さらに有島のかつての見神体験の意味が問われ、その背後にある〈死ヲ透シテ神ヲ見〉〔明23・2・18?〕るという一種の神秘主義的体験が、運命観とともに問題になるところでもある。

有島がこの理論を〈ベルグソンのいふ純粋持続〉〔一二〕を援用していることはすでに明らかにされていることであるが、[註9]〈個性の中には物理的の時間を超越した経験がある〉〔同前〕という認識[註10]は、〈個性〉が時間認識におけるクロノスを越え、カイロスのなかに存在する、あるいはカイロスそのものを本質とするものであることを表しているのであり、個性の本質としての他者性をみることが

できるのではないだろうか。このところに有島が、あえて個性との関係を〈遭遇〉と表現した意味を見ることができるのである。

〈そこにはもう自他の区別はない。二元的な対立はない。これこそは本当の生命の赤裸々な表現〉〔同前〕であるはずである。しかし、有島はその、本来第一原因であるべき内部生命の働きを疎外する力がある、というのである。

有島はそれを〈運命〉だと言い、以下のように述べているのである。

人は運命の主であるか奴隷であるか。この問題は屢々私達を悒鬱にする。この問題の決定的批判なしには、神に対する悟りも、道徳律の確定も、科学の基礎も、人間の立場も凡て不安定となるだらう。私もまたこの問題には永く苦しんだ。然し今はかすかながらもその解決に対する曙光を認め得た心持がする。〔一二〕

〈人間の意志の絶対自由〉〔同前〕を本能的生活者の体験として位置付けることによって、〈神〉の支配を否定した有島がなお、そこに依存すべき存在とも思える〈運命〉を意識しているということは、まことに奇異なことなのである。何故ならば、個性論、魂論、そして本能的生活論には、〈意志そのものゝ必然性〉を認めるもの以外の〈牽制すべき何等の対象もない〉〔同前〕のであって、運命論などというような要素のまったく介在する余地はないはずだからである。

すでに述べたように(註11)、有島には人間の自由意志を疎外するところの運命観があった。しかも、その運命観のなかに〈死〉の力を見なくてはならない存在であった。

〈死が間近に彼に近づく時に〉可能になる〈力〉が、換言すれば〈自然の力〉、〈自然の意志〉でもあったことを思うときに、〈本能とは大自然の持つてゐる意志を指すものとも考へることが出来る〉〔一四〕という有島にとって、それは、文字通り〈死〉への限りない接近を、好むと好まざるとを問わず、必然的に肯んじなくてはならない有島であることを表しているのではないだろうか。

*

人間には人間が大自然から分与された本能があると私はいつた。（中略）人間によつて切り取られた本能—それを人は一般に愛と呼ばないだらうか。〔一五〕

ここで言われている〈本能〉が、個性と同様に、意識的には人間の持っている内在的可能性としての本能であることはいうまでもないことであるが、そのような閉じられた円環のなかだけで終始する論理であるかというと、どうもそれだけでは解決不可能であることを、有島の愛の論理は暗示しているように思われるのである。それと同時に、有島の愛の論理が、その本質において、〈吸引するエネルギー〉〔五〕論であるという意味において、死の論理であることを認めざるを得ないのである。このような愛の論理であることによって、愛が関係概念ではないものであることの内的必然性を見ることができるのではないだろうか。

大自然、個性、本能の本質としての完全性、完成性が人間の本質

であるとする考え方は、調和を基調とする汎神論的自然観のなかに位置付けることのできる、肯定的人間観である。その意味では、自然観のなかにキリスト教信仰の受容と定着のさまを見たときに明らかになった汎神論的人間観（肯定的人間観）[註12]は、このところにおいてなお有島の人間観の基本として位置付けられているということができよう。カーペンターのいう〈神秘主義的自然観〉との等質性の指摘[註13]も、死の論理の肯定的位置付けの可能性を見出す試みにおいてまた意味のあることのように思われる。

【註】

1 有島武郎研究―「詩への逸脱」をめぐって㈡―〔昭51・11　梅光女学院大学「日本文学研究」第12号〕～有島武郎著作集第十輯『三部曲』を読む〔昭61・11　梅光女学院大学「日本文学研究」第22号〕

2 ①有島武郎研究―「詩への逸脱」をめぐって㈢―〔梅光女学院大学「日本文学研究」第一三号　昭52・11〕
②有島武郎研究―著作集第五輯『迷路』をめぐって―〔梅光女学院大学「日本文学研究」第一七、一八号　昭56・11、57・11〕

3 有島の人間観に見られる〈旅人性〉については、著作集第一二輯『旅する心』〔大9・11〕において詳述する予定である。

4 佐古純一郎「有島武郎における虚無への転落」〔『近代日本文学の悲劇』昭33・2　現代文芸社刊所収〕

5 有島武郎論―盲目状況認識をめぐって―〔「批言と構想」第三号　昭50・10〕

6 有島武郎研究―瞳憧憬をめぐって―〔梅光女学院大学「日本文学研究」第十号　昭49・11〕

7 ①有島武郎研究―「詩への逸脱」をめぐって㈤―〔梅光学院大学「日本文学研究」第一五号　昭55・11〕
②有島武郎研究―「詩への逸脱」をめぐって㈥―〔梅光学院大学「日本文学研究」第一六号　昭56・11〕

8 ①有島武郎研究―「詩への逸脱」をめぐって㈣―〔梅光学院大学「日本文学研究」一四号　昭54・11〕
②註7の①に同じ。

9 安川定男「一　有島武郎とベルグソン」〔『有島武郎論』昭42・11　明治書院刊所収〕

10 川端柳太郎の『小説と時間』〔朝日選書119　昭53・10〕に紹介されているF. Kermode〔The Sense of an Ending 1966〕の言葉で、クロノスは〈無意味に継起し、過ぎ去っていく―時間の流れ〉を、カイロスは〈意味のある時間―終わりと結びつけて意義の充塡された一時点〉であると説明されている。

11 運命観の考察〔昭42・11、拙著『有島武郎の文学』昭49・6桜楓社刊所収　昭49・6〕

12 自然観にみられるキリスト教受容と定着の考察〔昭38・12、註11に同じ〕

13 清水安治「第五章　エドワード・カーペンター」「第六章　有島武郎」〔『ホキットマン新研究』昭12・11　東京堂刊所収〕